

やりたいことをやれる場に



「校則は生徒総会で生徒自身が決めています」と小正裕佳子さん

「大学受験のシステムにとらわれず、自由に過ごせた」と獨協医科大学

特任講師で、日本テレビ

の報道番組「NEWS

ZERO」キャスターの

小正裕佳子さん(33、2

002年卒)は、神戸女

学院での6年間を振り返

る。高3の倫理の授業が

印象深い。芝生に座り、

先生が「地球ってさあ…

…」とつぶやく。「心が

自由になる授業でした」

高3の早い時期に「こ

の学校で今しかできない

ことをやりたい。たぶん

浪人するけど、ごめん」

と親に宣言。その分、生

徒会長を務めた生徒会を

はじめ、バスケット部や体育

祭に全力で打ち込んだ。

東京大学医学部健康科

「11年3月の東日本大震災に伴う福島第一原発事故に接し、「現場を目撃

しておかないと。今を逃

してはいけない」。NH

Kを約3年で辞め、獨協

医科大学国際協力支援セ

ンターの一員として約4

年間、福島県で住民の健

康調査などにあたった。

16年春からは特任講師

として学生を教える一

方、キャスターとしてテ

レビに復活した。「医療

や福祉の問題解決を進め

たいという思いは昔から

まったく変わらない。や

りたいことをやれる場に

いたい」。今も福島にた

びたび足を運んでいる。

キリスト教系で、ボラ

「校則は生徒総会で生徒

身が決めています」と小

正裕佳子さん

学・看護学科(当時)に進

学。よりよく生きるため

の医療や福祉に関心があ

った。同大大学院修了後、

NHKにアナウンサーと

して入局。配属先の新潟

放送局では、障がい者も

使いやすいスプーンや、

介護食を取材した。

肯定もせず受け止める。報道の世界に入ってから

も生きている感覚だ。

大学時代、罪をくり返

し犯す累犯受刑者などを

描いたドキュメンタリー

番組を見たことが、今の

仕事を志すきっかけに。

世論が動き、「テレビに

は社会を変える力があ

る」と感じた。

入社2年目の12年4

月。京都府亀岡市で約10

人が死傷する交通事故が

起きた。遺族を取材中、

「記者としてためかもし

れないが」一緒に涙を流

した。相手から「事件や

事故を食い物にするイメ

ージだった記者にも、心

があることを知った」と

言われたことが忘れられ

ない。遺族との交流は、

今も続いている。

「人の一番幸せな瞬間

と、一番不幸な瞬間に立

ち会うことになる仕事。

一生つきあうつもりで向

き合わないといけない」と感じています」

(編集委員・根本理香

中塚慧)



「女学院の仲間と会うと、「負けないようにがんばろう」と思える」と中田陽子さん